

本好き

早稲田大学 理工学術院

小峯秀雄

まあ、確かに本が好きかもしれない。最近では老眼で、小さい字が読みにくいので、Kindle で適切な大きさの文字で読んでいる。早稲田大学の学生生活課の小西治美氏から、「5 人の本好き教授が案内する～学生時代に『人生狂わされた』一冊」というお題で、選んでいただいたので、ちょっとだけ、自分の本好き・読書について振り返ってみることにした。でも、「人生が狂わせられた」とは思っていないので、期待外れであれば申し訳ない。

今は、実験的研究を進めて日本の未来のあるべき姿を学術論文として発表している。もしかしたら、これは、中学生ぐらいからの読書の影響かもしれない。中学生時代に、小説家気取りになって、多世界社会をモチーフにした SF を書いたりしていた。今、執筆している学術論文は、実際の実験データに基づく、かなりリアリティの高い近未来の世界を論じているのかもしれない。

【中学時代】

オヨヨ大統領シリーズ（小林信彦）

友達と読みあった。内容はほとんど憶えていないけど、ドタバタ喜劇のような展開。今テレビで行われているバラエティのような内容だったのかもしれない。50 年前のテレビでは、今のようなドタバタができなかったのかもしれない。ドリフターズの 8 時だよ！全員集合は、最低番組のレッテルを貼られ、家庭でも好まれなかった。そういう部分を、読書に求めていたのかもしれない。中学生・小峯秀雄は、

星新一のショート・ショートシリーズ（星新一）

先日、NHK でもいくつかの作品をミニドラマ化していた。研究では明確な論理を展開することばかり考える傾向がある。中学生・小峯秀雄も、効率を考えて生活していたかもしれない。そういう生活の中では、味わえない「不条理」に関心があったのだと思う。本当に起きたら嫌だけど、図書の中であれば、読んでいるときは、感覚的に不条理を感じられても、怖いと思えば、いつでも読書をやめて、平和な日常に戻れることに安心していたのかもしれない。「怖いもの見たさを読書は与えてくれる。」

日本列島七曲り（筒井康隆）

当時、NHK でドラマ化された「七瀬ふたたび」などをきっかけに、筒井康隆を知り読み始める。しかし、最初に読んだのが、この「日本列島七曲り」で、はたまた不条理な世界に。細かいお話しは、まったく憶えていない（いや、憶えてはいけけない）、ハチャメチャなエログロだったように記憶している。しかしなぜか、思春期の中学生には響いた。理由は分からない。その後、大人になって「残像に口紅を」に出会って、なんとなく、その意味を解釈したようにも思う。断筆宣言など、衝撃的な発言をする作家で、いつもハラハラさせられる作家であった。だからか、平穏な時期には、なぜか読みたくなる。受験期や研究に没頭しているときには、絶対に読みたくない。

レーン最後の事件（エラリークイーン）

ご存じ国名シリーズの推理小説作家・エラリークイーンが、バーナビー・ロス名で発表した「X の悲劇」、 「Y の悲劇」、 「Z の悲劇」に続く 4 作目の作品。衝撃的な結末に、中学生から高校生の頃の小峯秀雄は、とてつもない脱力感に。1 作目の「X の悲劇」から読み始め、2,3 作目と読み進めるうちに、主人

公ドルリー・レーンというシェイクスピア劇俳優に、尊敬と信頼に近い気持ちを持ってしまった。実在の人物にも近い気持ちを。そして……。本物の喪失感を、読書で感じるなんて、最初で最後かも。
<https://hkomine.w.waseda.jp/IbarakiAge/shasou/shasou2001/shasou0107.html>

の2話目

宇宙戦艦ヤマト（松本零士）

中学生の頃から、自動車好きの兄（その後、本田技術研究所の研究員に）の影響で読む。その後、テレビ放映で夢中に。とても器用でピンセットのような形の指を持つ兄との器用さの違いから（よく、秀雄は不器用だから・・・と言われて）、理工系に行くことを、中学生の頃は断念していた。それでも、「波動砲」とか「ワープ」という用語に憧れた。「エネルギー充填 120%！」などと言うセリフをよく口にしていた。読書は、それまでの人生では触れたことのない「言葉」と出会わせてくれる。

【高校～大学～社会人時代：何度も読んでいるものもあるので、明確に区分できない】

人間交差点（ヒューマンスクランブル）（画・弘兼憲史）

とても平凡で、比較的幸せな家庭に育った私にとって、さまざまな人生があることを教えてくれた漫画。作家は早稲田大学の先輩・弘兼憲史の画。描かれている辛い人生が、本当に自分のことになると、とても怖い。でも、描かれている辛い人生の方が、本当に「生きている」って思えるんじゃないかなど思ったりもした。平和に感謝しつつ、「真剣に生きる」ことを考えさせられた。同書に描かれている不幸に涙し、枕を濡らしたことも覚えている。「人に寄り添う」気持ちを育ててくれたのかもしれない。

幸福な家族（武者小路実篤）

実は、この本は、太宰治に傾倒した時期からのリハビリに読んだ感じ。何もかも幸せ。病弱な事態まで幸せに感じちゃうなんて、すごい設定。自分の人生で、ちょっとした嫌なこと（失恋とか）があったとき読むことがお薦め。とにかく前向きになれちゃう。だから私は、何回も読んでいました。えっ？たくさん失恋したのかって？う～ん、どうだったかな？

三国志（吉川英治）

次から次から出てくる英傑に憧れる。自分は、どんな英傑に憧れ、それに近い生き方をするかを考えた。今も、自分の研究の立ち位置を考える時、どの英傑の境遇に近いか、そして自分の信念の生き方・考え方を、三国志に登場する英傑で例える。本当に勝手であるが、研究の哲学では諸葛亮孔明を、そして、異分野との軋轢の時などは、趙雲子龍をイメージしてしまう。

項羽と劉邦（司馬遼太郎）

司馬遼太郎は大好きな作家のひとり。本書は、最初に読んだ本。その後、坂の上の雲や、竜馬がゆくなどなどへ。読み進めていくうちに、いつの間にか中国の大平原の中にいる。色のある風景が目浮かぶ。そして時々、映画になったものを観ると、陳腐に思ってしまう。緻密に文章で表現された本書ではじめて、読書による想像力のとてつもない凄さを感じた。

<https://hkomine.w.waseda.jp/IbarakiAge/shasou/shasou2010/shasou1003.html>

の2話目

沈まぬ太陽（山崎豊子）

電力関連のシンクタンクの研究所で、研究員として研鑽を積んでいる時に読みました。自分が大学院生のときに発生した日航機墜落事故の背景の詳細を語った、山崎豊子ならではのルポライティング的物語。組織の中の個人か、社会の中の個人かを自問自答した。そして、早稲田大学の校歌の一節「学の独立」を再確認するきっかけになった図書である。

<https://hkomine.w.waseda.jp/IbarakiAge/shasou/shasou2003/shasou0303.html>

<https://hkomine.w.waseda.jp/IbarakiAge/shasou/shasou2003/shasou0305.html>

不毛地帯（山崎豊子）

大人になると、嫌な感じだなど思っちゃった物語です。でも、いろいろな組織運営を経験すると、こういう物語が、意外と参考になっちゃったりして、全然、嬉しくないけど。

<https://hkomine.w.waseda.jp/IbarakiAge/shasou/shasou2005/shasou0504.html>

以下は、土木工学を教授する上で、多くのことを学んだ図書。

高熱隧道（吉村昭）

黒部の太陽（木本正次）

関門とんねる物語（田村喜子）

死の淵を見た男（門田隆将）

東日本大震災 語られなかった国交省の記録（道下弘子）

研究不正（黒木登志夫）

失敗の本質 日本軍の組織論的研究（戸部良一，寺本義也ほか）

徐々にではあるが、順次コメントを書いていきたい。

ランディ・パウシュ・最後の授業（ランディ・パウシュ）

2001年、研究所から大学に転出した私が、教育の何たるかも知らないで大学教員になってしまったことを後悔していた時に読んだ本。こんな授業をしてみたいと思った。教育とは何なのか？永遠の課題であるが、ほんの少しだが、様々な気づきを与えてくれた。

複雑系 科学革命の震源地・サンタフェ研究所の天才たち（M・ミッチェル・ワードロープ）

常識が、実は常識ではないと思わされた図書である。でも、この中に、科学と社会の関係を考えさせられる記述が、ずっと心に残っている。おそらく、科学者として、ずっと、この論述をリフレインするような気がする。

舟を編む（三浦しおん）

学術論文も、そうであるが、実験の様子が手に取るように論述される必要があると考えている。なぜなら、誰もが同じ実験をして、再現性が確認できるようにすることが、基礎科学者の基本的資質であるから。主人公の馬締くんのように、一つ一つの用語の意味を考え、もっとも適切と思われる言葉を選ぶことは、未来永劫、読まれ続ける論文を記す上で、必要不可欠なことなのだから。一見、文系と思われる馬締くんの行っていることは、理科系の間も模倣しなければならない。いや、理系・文系なっているから、日本はダメになるのである。すべての日本人が読むべき本と言える。